読 解 作 文 6

山崎　由喜代

Reading Comprehension and Composition 6

YAMASAKI Yukiyo

クラス形態

（時間数）週１コマ 10 週間

（受講者）15 人前後（10～20 人）。次のような傾向が見られる。①漢字系が多い。②来日後間もない受講生が少なくない。③話し言葉と書き言葉が違うこと、書く目的によって書き方が変わることを知らない受講生が少なくない。③ごく初級の文法項目が定着していない場合がある。④コースの開始時点でデアル体で書き通せない受講生が大半である。⑤レポートのための表現を使って意見を書く硬い文章と、個人の主観的な思いや考えを述べる文章または軽い雑誌記事の文章とのタイプの違いを意識しているようには見受けられない。例えば、名詞止めや「？」や「！」などの記号や倒置、省略などを使う、「～なければならない」と「～なくてはいけない」の使い分けをしない、などの傾向がある。⑥接続詞が正しく使えない。⑦「～に対して」、「～にとって」などの格助詞相当語句が正しく使えない。⑧句読点が適切に使えない。受講者はこの時点で自分の書く文の形がある程度決まっているということが言える。

目　的

作文の目的はレポートの表現を使って論拠に基づいた意見を書くことである。したがって自分の気持ちや感じていることを自由に書くのではないことを意識させるようにする。読解の目的は書くために文章内容、文章構成、文章表現を読み取ることである。硬い文体の文章、段落構成を意識した文章、序で問題提起をして結に答がある文章、事実文と意見文を書き分けた文章、主題がはっきりした文章を多く読むことで受講生が、そのような文章を意識的に書くことを目的としている。つまり、このクラスでは書くために読むのである。

授業の内容と進め方

（受講生への伝達）

はじめにこのクラスでは①書くために読む、②単に自分の気持ちや感じていることを書くのではなく、論拠を挙げて意見を書く、③小説などは読まず、序で問題提起をし、結でそれに応えて

いるような文章を選んで読む、ことを伝える。

（学期間の授業の流れ）

問題シートをつけた読解文を宿題として渡し、まず自力で読解させた上でクラスで答合わせをする。問題の内容は、文中の指示語が指す内容を問う細かな内容質問や要旨要約文を書かせる問題などである。前者の場合は、選択肢から答を選ぶ形式と答を書き込む形式がある。後者の形式の場合、本文中の答の箇所を抜き書きしただけで、質問と回答の視点が合っていないという回答が往々にして見られる。間違いには赤ペンで下線を引いて返却する。特に注意を促したい間違いはクラスでフィードバックをする。問題が難しい場合は前者の選択肢形式の問題にしている。間違いが多い場合や要約文が適切でない場合は後日再提出させる。読解問題の答合わせをした上で、クラスで文章構成、事実文と意見文、意見文の文型、段落構成の読み取りをする。

適当な長さで授業の目的に合う文章例がなかなか見つからないため、一部書き直した上で読解の材料として使うことも多い。また、書き直さずに原文のまま読ませて、どこを書き直せばよいかをクラスで一緒に検討することもある。

次に、宿題として読解文と同じトピックで構成を意識した作文を書かせる。コースの前半では段落文を、後半では「序・本・結」構成の作文を書かせる。提出作文の添削のし方は、受講生が自力で直せるだろう箇所には下線を引き、意味内容不明の箇所には「わかりません」と書いて、「再」と記し、再度自分で考えさせて書き直させる。受講生が自力で直せないだろう箇所には訂正文と説明を書き入れて返却する。この場合も訂正箇所数が多い場合には「再」と記して、書き直しを求める。クラス全体でフィードバックしたほうがよい間違い例は、投影機を使って、何が問題なのか、どのように書けばいいのかを間違い例を見せながら説明する。投影機でのフィードバックは好まれているようである。

宿題評価は基本的に提出の有無のみで評価し、出来具合は考慮しない。理由は、読解については出来具合によって評価をすることによって、自力でしなくなったり、わからないため提出が滞ったりすることを防ぐためと、コース終了時までに力が伸ばせればよいと考えるからである。しかし、2003年2学期は作文宿題に限って要約作文を含む全ての作文に、評価を示すことで動機付けとなること、同じ間違いを繰り返さないことを期待して、AからDまでの評価をした。そして、書き直しで良くなれば加点した。一回だけの試みなので一般化できないが、書き直し提出が増えたという良い効果があった。反面、初稿と比べて不自然な程、格段に良くなっている書き直し作文を提出する受講生も一名おり、これは良い効果なのか疑問である。

（10回の授業の流れ）

学期によって多少異なるが、ほぼ以下の①から⑧の流れで行っている。

①原稿用紙の使い方の例を紹介する。原稿用紙の使い方の実例を書き写す。

②デアル体への書き換え練習をする。

③一段落の文を読み、段落構成を読み取る。次に宿題として一段落文を書く。

④1～3段落の文をまず段落単位で読解し、次に文章全体の読解をする。その後で60字程度の要約文を書く。具体的には、宿題として受講生が自宅で読解質問シートに答を書き、次にクラスで答合わせをする。宿題となる要約文作成の準備として幾つかの文章について要約に使うキーワードや要点の確認をする。クラスで一緒に例題要約をする。フィードバック時にはクラスで要約モデル文や、受講生提出の要約文の中から他の受講生にも役立つ間違い箇所を見せる。提出要約文に問題があり、しかも再度受講生が自分で考えた方がいいと思われる場合は再提出させる。

⑤一文単位で事実文か意見文かを読み分ける練習をする。次に一段落以上の文章で読み分け練習をする。

⑥「序・本・結」からなる文章を読み、文章構成、段落構成、文章全体のキーワード、各段落の中心文を読み取る。

⑦「序」「本」「結」の表現文型を拾い読みする。段落文と同様に、まず読解を宿題として課し、次にクラスで答合わせをし、要約文を書く。

⑧引用の形式と例を文章で紹介し、宿題で引用を含む作文を書く。

⑨引用を使った作文のフィードバックをする。

⑩読解と作文のテスト（作文テストは毎回辞書使用可としている）。

教　材

自作プリント、日本語教科書（下記）や国語参考書・新書・新聞記事の文章例や練習問題の一部コピー、それらを元に作った文章例や練習問題。

- アカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院　留学生の日本語③』アルク、2002年
- アカデミックジャパニーズ研究会『大学・大学院　留学生の日本語④』アルク、2002年
- 河田真理他『論文ワークブック』くろしお出版、1997年
- 佐藤喜久雄『表現技術①』創拓社、1994年
- 佐藤喜久雄『表現技術②』創拓社、1994年
- 二通信子・佐藤不二子『留受講生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク、2000年

評　価：

（割合）テスト・小テスト50%、宿題・課題40%、平常10%（2003年2学期の場合。他学期もほぼこれに準じる）。

（基準）読解、作文ともに宿題は提出の有無で評価する。読解テストと作文テストの割合は1：1とする。読解テストは各設問の配点を適当に決める。作文テストは文法の正しさ、語彙の適切さ、表現形式や内容の豊かさ、課題に合致しているか、その他で評価する。2003年2学期は作文評価に関して、作文テストと同様の基準でA,B,C,Dの評価をつけた。書き直し再提出で良くなっていれば加点した。

反省点・問題点・課題

やり方で反省すべきことは多い。その最たる反省点はコース開始時に使用する配布プリントが決定していないことである。これには毎回少しずつ違う試みをしたい、その時の受講生にできるだけ合うものにしたいという理由がある。しかし受講生としては前もってプリントを一式受け取っておいた方が受講生としてもやりやすいだろう。次に使った文章が少々難しかったことも反省点のひとつである。受講生はだいたいの意味は取っているように見えるが、正確な読解を問うたり要旨を書かせたりすると、できない受講生がいる。しかし半数以上の学生にとってはチャレンジになっているので、クラスでの読解作業にもう少し時間をかけて丁寧にする、もう少し易しい文章を探すことなどを考えたい。

授業を準備する上での最大の困難点を1つあげると、それは読解教材の不足である。授業の目的に合い、しかも短くまとめられた（約3頁以内の長さ）文章例を見つけることは難しい。手本となるような文章を教師が自分で書くことも簡単ではない。どのような文章を書くのかというイメージが受講生に具体的に定着するように、多くの文章例を見せることが大切だと思う。受講生の書いた作文を見ると、十分な文章例を受講生に提示できていないことがよくわかる。

授業運営上の問題点は3つある。第1に授業回数が足りないことである。読解と作文をテストを除き9回の授業でしなければならない。まず受講生が自宅で読解作業をしてきたことを前提にクラスで読解フィードバックを行うが、作文の説明やフィードバックのための時間も必要であり、読解のための時間を毎回使うことができない。また、受講者にとっても読解と作文の両方を宿題として毎回課されるのは負担が大きすぎる。第2に日本語文はわかるが論理の流れが読みとれない作文へのフィードバックは各学生に個別に対応しなければできないことである。これは非常に時間がかかり、受講者と教師の時間の都合も合わなければならない。実際には時間が合えば行っているが、特に本人が望まなければ行っていない。

これらの問題点に対して、次のことを考えてみた。教師がチームを組んで作文のモデルとなる十分な数の読解文章例を用意することである。学生は多くの文章例を見ることで、受講生は頭で理解するだけでなくイメージをしっかりと持つようになるだろう。そればかりでなく、これらの文章例から抽出された文章構成メモや段落構成メモだけを見て再び文章化することで基礎的な作文練習ができる。また、文章構成メモや段落構成メモを受講生自身の手で作れば構成を把握する練習にもなる。これは論理的な文を書く練習の助けになるだろうし、接続詞の使い方の練習もできるだろう。